

# これからの妊産褥婦の健康管理システムに関する研究

主任研究者

九州大学 中野仁雄

要約：本研究班は平成7年度に3年間の予定で活動を開始した。課題は、①妊産褥婦へのエモーショナル・サポートに関する研究、②女性の健康からみた母子保健のあり方に関する研究、③早産の予知・予防に関する研究である。これに対し、女性の生涯健康への関心が近年急速な高まりをみせるなかで、課題②を重点化事項として2分し、それぞれに分担課題を掲げることとした。両者の総論的な重複はあえていわず、そのなかで、ひとつは前年度に引き続き妊娠分娩産褥と成人病との相関・因果をさらに追求すること、いまひとつは因果関係の存在を前提とした場合、どのような更年期障害を中心とした中高年における疾患を防止できるかを探ること、の各論的視点を設けた。さらに、母子保健事業における緊急事項として、感染対策を取り扱う分担課題も増設した。平成8年度の研究課題は次のとおりである。

- ①妊産褥婦へのエモーショナル・サポートに関する研究
- ②女性の健康からみた母子保健のあり方に関する研究
- ③ハイリスク分娩の予防と妊婦健康診査のあり方に関する研究
- ④妊娠出産等に伴う母子の感染予防に関する研究
- ⑤更年期の障害・疾患の予防に関する研究

それぞれの課題を分担して研究実施にあたることとして、5人の分担研究者をたて、これに、必要な研究協力者を求めて問題解決にあたることとした。研究の実施方法は、課題に即しての共同研究、個別研究のいずれをも採用可とし、分担研究班会議と全体研究班会議の両者により、研究の一貫性、方向性を確保するための討論を行った。このうち課題④、⑤は、今年度が開始年度にあたり、その成果はパイロット調査の結果である。

見出し語：妊娠・分娩・産褥、精神機能障害、不安、

エモーショナル・サポート、母乳内ダイオキシン、思春期障害、成人病、虚血性心疾患、腎透析、尿失禁、腰痛症、リスクファクター、早産、低出生体重児、予知・予防、子宮頸管長、エラスターゼ、頸管培養、前期破水、更年期障害、骨粗鬆症、高脂血症、アンケート調査、母子感染、スクリーニング、先天性感染症

研究方法：各分担研究者報告、および研究協力者報告に詳述する。

研究結果：かねて母子保健は母子医療の領域までもカバーして各種事業により向上の道をたどってきたことに近年、急速な少産少子、そして高齢化社会の到来のさなか、未来対応型に数多くの政策事業が矢継ぎ早に打ち出され、実行に移されつつある現状にあって、事業対象を周産期における母子保健・医療に限る視点だけでは視野狭搾の感を否めない状況が生じた。即ち、保健・医療サービスの地域システム化、これと連動するハイリスク妊娠・分娩・産褥、ならびに胎児・新生児管理の実際に対しては飛躍的な進歩がみられるが、このような、ライフ・ステージ的な、また身体指向的な視点に対し、未来対応の目的に叶う視点としては、生涯を通じての、さらにそれを超えたライフ・サイクルとしての問題の位置づけが必要である。また、身体のみならず心の問題をも視野に入れた対応が求められる。前者には、高血圧、冠動脈疾患、糖尿病、あるいは更年期障害などの中高年の女性の健康を脅かす具体的な問題が、また後者には今日の切迫した問題として、母子精神保健の重要性があげられる。いずれも本邦ではあまりなじみがなかった領域に踏み込むことの必要を意味する。このような視角から課題を分担して研究を行い以下のような成果を得ることができた。

## 1 妊産褥婦へのエモーショナル・サポートに関する研究

エモーショナル・サポートに関する母子保健プログラムは精神的な健康の増進策と疾病対策により、親子の心の問題への解決策の提示を目的とする。方法の策定には、英国を精神保健関連事業の先進国と位置づけ、これの日本版を考案することが効率的である。さらに経済効率を考える上では、全例を対象とするのではなく、ハイリスク集団に対する強化サポートとして運営するのがよい。ここにはソフト・ハード両面での具体策が考えられる。ハイリスク症例の早期発見に有効な判定基準としては、妊産褥婦に直接的に介入し、スクリーニングを行う方法がよい。これには、妊娠各時期から産褥期に至るまで同一の精神状態測定スケールを用いて、経時的な変動をとらえ、その計量値あるいは変動パターンからその後の産後うつ病発症のリスクを推測する方法、ならびに産後うつ病のリスク因子である、マタニティー・ブルーズの発症に注目する方法とがある。全例にこれを行い、その結果から高頻度発症群の特徴を抽出すれば精神状態評価を行わないでも、母体合併症を有し、長期に入院する妊婦など、ハイリスク集団を推定する道につながる。サポートの具体的な方法としては、心の奥深く秘めた精神的非定常をありのままに、有効に表現させる方法こそが症状と状態を特定するうえでも、サポート介入効果を確かなものにするうえでも核心となる。保健・医療の現場で行うには、個別化面接や伝を相談が、またコミュニティにはピアサポート（仲間による支援）が開発の対象である。いずれにおいても、支援者と対象との交互作用効果が結果を左右し、支援人材の育成にも考慮を要する。

今年度も継続して、母乳内のダイオキシン等を定点的・定時的調査として行った。その結果、経年変動も地域差も大きくないとの現状を確認した。

## 2 女性の健康からみた母子保健のあり方に関する研究

妊娠・分娩・産褥の異常が女性の各ライフステージにおける健康とどのような関連を有するかを解明する目的で、次のような問題に取り組んだ。思春期の、身体的・情緒的問題は、その後の妊娠分娩の異常に関連する。成人病（高血圧、腎透析、心電図異常など）の発症に対して、妊娠分娩産褥の異常は関連しており、それぞれに周産期の異常を示すパラメーターが存在する。QOLの問題として腰痛に注目

すると、その多くは妊娠・分娩時の腰痛を経験している。女性の生涯健康に対して、妊娠・分娩・産褥におけるさまざまなエピソードは強く相関することから、両者を分離した対策管理を行うより、重合させて行うことの有効性が示唆された。

## 3 ハイリスク分娩の予防と妊婦健康診査のあり方に関する研究

過年度研究から得た、子宮頸管長測定・頸管培養の早産予知における有効性を根拠にして、「早産防止プロトコール」を作成、試行した。これは、妊娠の各時期にスクリーニングを行い、対象者を選定、入院を基本とした治療を行うものである。その結果、対照との間で早産発生の頻度が低値を示した。前期破水の取り扱いについてアンケートによる実態調査を行った。施設間の違いは、NICUの活動状況などの後方支援の如何によって判断の差があることによる。

## 4 妊娠出産等に伴う母子の感染予防に関する研究

アンケートにより本邦における母子感染の実態調査を行った。13施設、38,000例を対象に調査した結果、13種の微生物に対するスクリーニング検査実施状況を把握した。検査の陽性率ではGBSが最も高く、またHTLV-1では地域差が大であった。

## 5 更年期の障害・疾患の予防に関する研究

妊娠・分娩・産褥が更年期に好発する疾患の発症に与える影響を明らかにするために、目的に見合うアンケート調査票を作成し、今年度はパイロット調査を行った。

### 考察：

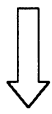
母子精神保健プログラム策定への目処がついてきた。来年度にこれを完成することができる見込みである。妊娠分娩産褥と女性の生涯健康の関連が後方視的調査で確認された。成人病のうち関連性の大小とともに対象疾患がより明確になれば、前方視的に防止策を企画し、長期に亘る追跡への目処が立つ。相関の実証と因果想定のもとにおこなう防止プログラムとが核心である。緊急な具体的事例として、早産と母子感染の問題に取り組んだ結果、前者に対しては、防止プログラムを策定出来る見通しとなった。後者はまだパイロット調査の段階に留まる。

平成8年度に発足した「母子」の対策事業の補完を目標にして、次年度研究に移行する必要がある。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



平成 8 年度厚生省心身障害研究

「これからの妊産褥婦の健康管理システムに関する研究」

これからの妊産褥婦の健康管理システムに関する研究

主任研究者

九州大学中野仁雄

要約:本研究班は平成 7 年度に 3 年間の予定で活動を開始した。課題は、(1)妊産褥婦へのエモーショナル・サポートに関する研究、(2)女性の健康からみた母子保健のあり方に関する研究、(3)早産の予知・予防に関する研究である。これに対し、女性の生涯健康への関心が近年急速な高まりをみせるなかで、課題(2)を重点化事項として 2 分し、それぞれに分担課題を掲げることとした。両者の総論的な重複はあえていとわず、そのなかで、ひとつは前年度に引き続き妊娠分娩産褥と成人病との相関・因果をさらに追求すること、いまひとつは因果関係の存在を前提とした場合、どのような更年期障害を中心とした中高年における疾患を防止できるかを探ること、の各論的視点を設けた。さらに、母子保健事業における緊急事項として、感染対策を取り扱う分担課題も増設した。平成 8 年度の研究課題は次のとおりである。

- (1)妊産褥婦へのエモーショナル・サポートに関する研究
- (2)女性の健康からみた母子保健のあり方に関する研究
- (3)ハイリスク分娩の予防と妊婦健康診査のあり方に関する研究
- (4)妊娠出産等に伴う母子の感染予防に関する研究
- (5)更年期の障害・疾患の予防に関する研究

それぞれの課題を分担して研究実施にあたることとして、5 人の分担研究者をたて、これに、必要な研究協力者を求めて問題解決にあたることとした。研究の実施方法は、課題に即しての共同研究、個別研究のいずれをも採用可とし、分担研究会議と全体研究会議の両者により、研究の一貫性、方向性を確保するための討論を行った。このうち課題(4)、(5)は、今年度が開始年度にあたり、その成果はパイロット調査の結果である。

見出し語 :妊娠・分娩・産褥、精神機能障害、不安、エモーショナル・サポート、母乳内ダイオキシン、思春期障害、成人病、虚血性心疾患、腎透析、尿失禁、腰痛症、リスクファクター、早産、低出生体重児、予知・予防、子宮頸管長、エラストアーゼ、頸管培養、前期破水、更年期障害、骨粗鬆症、高脂血症、アンケート調査、母子感染、スクリーニング、先天性感染症

研究方法:各分担研究者報告、および研究協力者報告に詳述する。

研究結果:かねて母子保健は母子医療の領域までもカバーして各種事業により向上の道をたどってきた。ことに近年、急速な少産少子、そして高齢化社会の到来のさなか、未来対

応型に数多くの政策事業が矢継ぎ早に打ち出され、実行に移されつつある現状にあって、事業対象を周産期における母子保健・医療に限る視点だけでは視野狭搾の感を否めない状況が生じた。即ち、保健・医療サービスの地域システム化、これと連動するハイリスク妊娠・分娩・産褥、ならびに胎児・新生児管理の実際に対しては飛躍的な進歩かみられるが、このような、ライフ・ステージ的な、また身体指向的な視点に対し、未来対応の目的に叶う視点としては、生涯を通じての、さらにそれを超えたライフ・サイクルとしての問題の位置づけが必要である。また、身体のみならず心の問題をも視野に入れた対応が求められる。前者には、高血圧、冠動脈疾患、糖尿病、あるいは更年期障害などの中高年の女性の健康を脅かす具体的な問題が、また後者には今日の切迫した問題として、母子精神保健の重要性があげられる。いずれも本邦ではあまりなじみがなかった領域に踏み込むことの必要を意味する。このような視角から課題を分担して研究を行い以下のような成果を得ることができた。

## 1 妊産褥婦へのエモーショナル・サポートに関する研究

エモーショナル・サポートに関する母子保健プログラムは精神的な健康の増進策と疾病対策により、親子の心の問題への解決策の提示を目的とする。方法の策定には、英国を精神保健関連事業の先進国と位置づけ、これの日本版を考案することが効率的である。さらに経済効率を考える上では、全例を対象とするのではなく、ハイリスク集団に対する強化サポートとして運営するのがよい。ここにはソフト・ハード両面での具体策が考えられる。ハイリスク症例の早期発見に有効な判定基準としては、妊産褥婦に直接的に介入し、スクリーニングを行う方法がよい。これには、妊娠各時期から産褥期に至るまで同一の精神状態測定スケールを用いて、経時的な変動をとらえ、その計量値あるいは変動パターンからその後の産後うつ病発症のリスクを推測する方法、ならびに産後うつ病のリスク因子である、マタニティー・ブルーズの発症に注目する方法とがある。全例にこれを行い、その結果から高頻度発症群の特徴を抽出すれば精神状態評価を行わないでも、母体合併症を有し、長期に入院する妊婦など、ハイリスク集団を推定する道につながる。サポートの具体的な方法としては、心の奥深く秘めた精神的非定常をありのままに、有効に表現させる方法こそが症状と状態を特定するうえでも、サポート介入効果を確認なものにするうえでも核心となる。保健・医療の現場で行うには、個別化面接や伝を相談が、またコミュニティーにはピアサポート(仲間による支援)が開発の対象である。いずれにおいても、支援者と対象との交互作用効果が結果を左右し、支援人材の育成にも考慮を要する。

今年度も継続して、母乳内のダイオキシン等を定点的・定時的調査として行った。その結果、経年変動も地域差も大きくないとの現状を確認した。

## 2 女性の健康からみた母子保健のあり方に関する研究

妊娠・分娩・産褥の異常が女性の各ライフステージにおける健康とどのような関連を有するかを解明する目的で、次のような問題に取り組んだ。思春期の、身体的・情緒的問題は、その後の妊娠分娩の異常に関連する。成人病(高血圧、腎透析、心電図異常など)の発

症に対して、妊娠分娩産褥の異常は相関しており、それぞれに周産期の異常を示すパラメーターが存在する。QOL の問題として腰痛に注目すると、その多くは妊娠・分娩時の腰痛を経験している。女性の生涯健康に対して、妊娠・分娩・産褥におけるさまざまなエピソードは強く相関することから、両者を分離した対策管理を行うより、重合させて行うことの有効性が示唆された。

### 3 ハイリスク分娩の予防と妊婦健康診査のあり方に関する研究

過年度研究から得た、子宮頸管長測定・頸管培養の早産予知における有効性を根拠にして、「早産防止プロトコール」を作成、試行した。これは、妊娠の各時期にスクリーニングを行い、対象者を選定、入院を基本とした治療を行うものである。その結果、対照との間で早産発生の頻度が低値を示した。前期破水の取り扱いについてアンケートによる実態調査を行った。施設間の違いは、NICU の活動状況などの後方支援の如何によって判断の差があることによる。

### 4 妊娠出産等に伴う母子の感染予防に関する研究

アンケートにより本邦における母子感染の実態調査を行った。13 施設、38,000 例を対象に調査した結果、13 種の微生物に対するスクリーニング検査実施状況を把握した。検査の陽性率では GBS が最も高く、また HTLV-1 では地域差が大であった。

### 5 更年期の障害・疾患の予防に関する研究

妊娠・分娩・産褥が更年期に好発する疾患の発症に与える影響を明らかにするために、目的に見合うアンケート調査票を作成し、今年度はパイロット調査を行った。

考察：

母子精神保健プログラム策定への目処がついてきた。来年度にこれを完成することができる見込みである。妊娠分娩産褥と女性の生涯健康の関連が後方視的調査で確認された。成人病のうち関連性の大小とともに対象疾患がより明確になれば、前方視的に防止策を企画し、長期に亘る追跡への目処が立つ。関連の実証と因果想定のもとにおこなう防止プログラムとが核心である。緊急な具体的事例として、早産と母子感染の問題に取り組んだ結果、前者に対しては、防止プログラムを策定出来る見通しとなった。後者はまだパイロット調査の段階に留まる。

平成 8 年度に発足した「母子」の対策事業の補完を目標にして、次年度研究に移行する必要がある。